

上がってくる。同様に上の盤の時刻の数字および目盛り、上の盤の月日が黄色で印刷されているので読みづらい。黒で印刷されていた改訂前のもののほうがよく、むしろ改悪である。

室内で使用する時はさきほどの欠点はほとんど気にならない。私は観測計画を練る時に星座早見盤を添付の高度方位図と共に用いる。観測開始の目安は多くの場合天体の Air-Mass が 2 となる高度 30 度を越える時で、その時刻を調べながら観測計画を立てるのである。パンフレットには紙に印刷された添付の高度方位図を上盤の透明な窓の下に入れて極細のフェルトペンなどで転写するようにと説明があるが、細くてきれいな曲線は描けない。私は OHP フィルムにコピーしてセロテープで張り付けて使っている。ただしゼロックスなどで黒線がやや太く、うるさく感じられ見づらい。できることなら極細で印刷されたフィルムを添えて欲しかった。

この三省堂のものを含め 5 種類の星座早見盤を比較してみると、それぞれにいろんな工夫がなされていることが解る。例えば天球を平面であらわす際の歪みを軽減す

るためおわん型の星座早見もある。三省堂の星座早見盤の特長を挙げるとすれば、天文薄明の終わり・始まりの時刻を知ることができるとか、南北に長い日本の事情を考慮して、北緯 25 度から 45 度まで 5 度ごとに窓枠や高度方位図が用意されているなどの点であろう。後者の点について言えば、他の星座早見盤は使用する緯度が限定されているが、盤面はシンプルで見やすくなっている。

初めにも述べたように誰がどのような目的で使用するかによって、評価が分かれるものである。機能を盛り込むとかえて使いづらいものになってしまうことも否定できない。しかし完全無欠なものなどありえない。上に述べたなかではややマイナス面にとらわれているが、他に劣っているというわけではなく、むしろこの三省堂の星座早見盤は全体としてよく仕上がっているし機能としてもかなり盛り込んであるというのが私の印象である。

(浮田信治)

◇ 12 月の天文暦 ◇

日	時	分	記	事
1	15	49	下 弦	
1	18	23	水 星	外合
2	15	28	月	最遠
7	6	34	大 雪	(太陽黄経 255°)
9	14	36	朔	
16	12	47	月	最近
16	14	40	上 弦	
22	0	28	冬 至	(太陽黄経 270°)
23	4	47	天王星	合
23	14	29	望	
26	20	57	土 星	合
30	12	55	月	最遠
31	13	57	下 弦	
31	17	39	海王星	合

1988 年 9 月の太陽黒点 (g, f) (国立天文台)

1	13,	170	11	—,	—	21	15,	82
2	11,	149	12	—,	—	22	—,	—
3	8,	143	13	8,	45	23	—,	—
4	—,	—	14	9,	44	24	—,	—
5	—,	—	15	—,	—	25	—,	—
6	—,	—	16	10,	46	26	—,	—
7	8,	48	17	—,	—	27	—,	—
8	—,	—	18	—,	—	28	—,	—
9	11,	43	19	13,	67	29	13,	117
10	—,	—	20	16,	79	30	—,	—

(相対数月平均値: 119.2)

◇ 12 月の日月惑星運行図 ◇

